（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　石井　剛

中国清末民初期の学術転型期のディスコースの中には、清代中期の漢学者戴震（1724ー77）の学術思想に関する議論が多く存在する。本論文はその戴震論について、二つの側面から考察を行ったものである。一つは、清末民初期に「戴震の哲学」が形成されていったプロセスを探り、その内容を解明すること、もう一つは、戴震に起源を持つ哲学的思弁が清末期にどのような問題のもとで、どのように戴震を批判的に継承していったかを分析することである。書の構成は序論と上編第１・第２章と下編第３ー第６章からなっている。

上編においては、梁啓超（1873ー1929）と胡適（1891ー1962）が「戴震の哲学」を構築したプロセスを解明する（第１章）とともに、戴震の学術体系が明末に伝来した西学の影響下で形成された漢学的哲学としての性格を持っていたことを明らかにする（第２章）。

下編においては、清末の劉師培（1884ー1919）と章炳麟（1869ー1936）を取り上げて、彼らが戴震の哲学をどう批判的に継承していったのかを論じ、両者の哲学が全く対照的なことを明らかにする。すなわち、劉師培は漢学を通過した上で、再び戴震を宋学的哲学の範疇に引き戻して、目的論的歴史観の中にそれを位置づけた（第３章）のに対して、章炳麟は漢学的哲学をより深めながら、反目的論的な独自の哲学観を構築した（第４章）というのがそれである。また第５・第６章では、彼らが戴震の小学研究をどのように吸収し消化していったのかについて分析を試み、特に章炳麟が戴震の体系を継承しながら、それを自らの「斉物」的世界像につながるような言語観に組み替えていったことを跡づける。

本論文で第一に評価すべきは、研究方法の斬新さである。戴震の学術思想については戴震が清代を代表する碩学のため、数多くの専門研究が展開されてきたが、師江永との学問方法の継承関係など、未解明なところがあまりに多く、評価が安定していない。著者はそれに対して、根本的に発想を変え分析方法を改めて、哲学形成期のオピニオンリーダーの戴震論を徹底的に分析し、逆照射して成功裏に戴震像を打ち立てた。第二に評価すべきは、劉師培などの宋学的解釈による「戴震の哲学」像が、必ずしも明末以来の学術的ダイナミズムを適切にとらえていないことを明らかにしたところである。著者によれば、戴震は西学の知識や思考方法から大きな影響を受けて、明代までとは異なる学を行ったといい、清代には明末に流入した西学の影響のもとで方法的に大きな転換を遂げた新しい哲学が構築されようとしていたという。爾後の研究者は著者の結論に賛成するにしろ反対するにしろ、本論文の検討ぬきには清代以降の思想史を論じることはできないであろう。

本論文の論述にはやや思弁的すぎるところもあるが、逆照射の方法によって「戴震の哲学」形成の歴史的プロセスを解明し、照射の方法によって戴震以降の新しい哲学が清末期に見せた展開の姿を明らかにしており、新たな研究地平を切り開いたということができる。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。